

2 抗精神病薬内服症例における糖代謝異常およびメタボリックシンドロームについての検討

福井 直樹・鈴木雄太郎・渡邊 純蔵
 須貝 拓朗・澤村 一司・小野 信
 村田 繁雄*・鈴木 雄二**・染矢 俊幸
 新潟大学大学院医歯学総合研究科
 精神医学分野
 飯塚病院*
 末広橋病院**

【目的】統合失調症患者では、一般集団に比べ糖尿病の有病率が高く、さらに、治療に用いられる抗精神病薬には、糖代謝異常を惹起することも知られている。一般集団における糖尿病有病率が欧米より高い本邦においては、統合失調症患者の糖尿病合併に対してより注意する必要がある。抗精神病薬服用中の患者に対しての空腹時血糖モニタリングは一般的となっているが、内科領域においては、インスリン抵抗性や心血管死亡リスクと相関する糖負荷後2時間血糖値の異常などを早期発見することの重要性が認識されている。本研究では、抗精神病薬服用中の統合失調症患者を対象に75gOGTTを行い、糖代謝異常を詳細に検討することを目的とした。また、抗精神病薬の副作用として問題となる糖尿病、脂質代謝異常、肥満は、従来それぞれ独立した疾患概念として扱われてきたが、近年これらの疾患は密接に関連していることが判明し、同一個体に糖尿病、脂質代謝異常、肥満などが重複した状態をメタボリックシンドローム(MS)と診断するようになった。統合失調症患者におけるMSの有病率を調査することも目的とした。

【方法】精神科病院で入院治療を受けており、糖尿病の既往のない統合失調症患者63名を対象とした。対象の内訳は、男性39名、女性24名、平均年齢43±14歳。47名が抗精神病薬単剤、12名が抗精神病薬2剤、4名が抗精神病薬3剤による薬物治療を受けていた。主剤の内訳は、オランザピン23名、リスパリドン19名、クエチアピン9名、ペロスピロン6名、従来型抗精神病薬6名であった。全対象に対して、12時間の絶食後に空腹時血糖・インスリン、HbA1c、脂質代謝(総コレステ

ロール、TG、HDL、LDL)、BMI・ウエスト・血圧などの検査を行った。また、55名に対しては75gOGTTも行った。本研究は新潟大学医学部遺伝子倫理審査委員会にて承認を受けており、対象はあらかじめ本研究の目的について十分に説明を受け、書面で同意の得られた者のみとした。

【結果】MSの各診断基準の異常頻度は、腹腔内脂肪蓄積(ウエスト径;男性85cm以上、女性90cm以上)は男性23.1%、女性13.0%、高TG血症(150mg/dl以上)は19.0%、低HDL血症(40mg/dl未満)は17.5%、高血圧(収縮期130mmHg以上または/かつ拡張期85mmHg以上)は10%、空腹時高血糖(100mg/dl以上)は4.8%であった。MSの診断基準を満たしたのは2名(3.2%)であった。インスリン抵抗性の指標であるHOMA-IRの上昇(2以上)を34.9%、インスリン分泌指数の低下(0.4以下)を14.5%、2時間血糖異常(140mg/dl以上)も21.8%に認め、そのうち2名(4.9%)は糖尿病型を示した。

【結語】統合失調症群におけるMSの有病率を明らかにするためには、さらに対象症例を増やして検討する必要があると思われる。また、通常行われている空腹時血糖検査のみでは、糖代謝異常のごく一部しか検出されないことが示唆された。

3 サイトカイン・神経栄養因子の遺伝子多型と統合失調症との関連研究

布川 綾子*・渡部雄一郎*・村竹 辰之**
 福井 直樹***・金子 尚史****
 小泉暢大*・染矢 俊幸*、***
 新潟大学医歯学総合病院精神科*
 古町心療クリニック**
 新潟大学医歯学総合研究科精神医学分野***
 県立小出病院精神神経科****

【目的】脳由来神経栄養因子(BDNF)は中枢神経系神経細胞の生存や分化、長期増強や空間記憶に作用する成長因子である。一方、IL-1は炎症性サイトカインで、脳内にも発現し神経変性やシナプス可塑性に作用する。いずれも脳内で重要